

チベット文字システム開発の歴史

教授 福田 洋一
(仏教哲学(チベット))

Mac OS で使われる言語が列挙されたキーボードのリストの中に「Tibetan - Otani」という文字と、「人」をデザインした大谷大学のシンボルマークが慎ましく含まれていることを知っている人は少ない。その「Otani」が「大谷大学」を意味していることを知っている人は、更に少ないであろう。しかし、これは大谷大学がチベットの文化に対して行った大きな貢献を表している。

大谷大学とチベットの関係は古い。東本願寺派の僧侶寺本婉雅は、20世紀初めに北京でチベット語大蔵経を購入して最初に日本にもたらし、大谷大学図書館に収めた。以後大谷大学では、貴重なチベット語文献を使用した仏教研究の伝統が今に至るまで続いている。そして今や新しい時代に対応してコンピュータの世界にもチベット文字のシステム化という大きな足跡を残したのである。

このチベット文字のコンピュータ化の立役者が、大谷大学出身の世界的なチベット学者今枝由郎先生(1947～)である。今枝先生は、1969年大谷大学四年在学中にフランスに留学した。当時パリには著名なチベット学者や仏教学者が集まっていた。その中で今枝先生はチベット学者スタン教授とマクドナルド女史の下でチベット史を学んだ。スイスのチベット寺院に数ヶ月滞在した後、ふたたびパリに戻ってスタン先生の下で2年間助手を務めた。まだこのとき、大谷大学の学部四年生で休学したままだったのだから、異例の待遇である。その後、大学卒業のために日本に帰国する途中で、1年近くインドやネパールのチベット難民キャンプを訪れた。当時の欧米の若いチベット学者は、みな先生と同様ヒッピーのようにインドなどを放浪していたが、日本人でそのような道を辿ったのは今枝先生くらいであろう。その間に国際東洋学会議で古代チベット王国における中国禅とインド仏教の論争に関する研究発表を行い、それがフランス国立科学研究センターで評価され、結局は大谷大学を卒業することなく、1974年同センターの史上最年少の研究員に採用された。

だが、先生の波瀾万丈の人生はまだまだ緒に就いたばかりである。1975年暮れ、パリを訪問していたブータン国立図書館長の高僧ロボン・ペマラ(ロボンは日本語の阿闍梨に相当し、密教の最上位の導師を意味する)のお世話をするうちに、その人格と学識に感銘を受け、当時鎖国をしていたブータンとの長い交渉の末、1981

年にフランス国立研究センターからブータンの国立図書館顧問として出向することになった。最初数ヶ月の予定であったが、結局はその後10年間、ブータンに留まることになる。その間、ロボン・ペマラの下でブータン史の研究やチベット仏教の研究に従事した。

今枝先生は、ブータン国立図書館顧問として、古い文献の整理と目録作成にも尽力された。その目録は手書きではなく、データベース化することになったが、そのためにはコンピュータでチベット文字を処理できる必要があった。先生はそれが可能かどうかを、世界中のプログラマや研究者、コンピュータ企業に相談に出かけ、結局現時点でそれが可能なのは、アップル社のMacintosh上の多言語システムのみであるとの結論に至った。そしてMacの多言語システムの開発に携わったプログラマ、スティヴ・ハートウェル氏とともにそのプロジェクトを開始した。

チベット文字は極めて複雑な法則のもとに、入力されたキーによって文字の形を変化させていく。おそらく世界で最も複雑な処理を要する文字システムの一つである。しかし、プログラマは全ての条件が提出されれば、どれほど複雑な規則であってもプログラムできると考えていた。一方、文系のチベット学者は文献は読めるが、チベット文字にどのような形態変化の法則があるかの情報を提示するのは難しかった。その変換法則を実現できるフォントを開発し、さらに目録データベースを開発するには、その後数年を要した。こうして今枝先生のブータン滞在の後半はチベット文字のコンピュータ化という、先生の専門から遠く離れたプロジェクトに係わることとなった。

幸いにしてチベット文字システムは完成し、さらには1988年にブータンの政府系新聞『クエンセル』がこのMacintosh上のチベット文字システムを使用することになった。そして政府の公文書にも同システムが採用されることとなり、そのためにユネスコからの資金援助が当てられた。こうして、数年前には思いもしなかったチベット文字のコンピュータ化が実現することとなった。

これで一段落と今枝先生は研究に専念するために10年間にわたるブータン出向を終えパリに戻った。しかし、実際にはこれで終わりではなかった。ご存じのようにコンピュータシステムは常に進歩していき、現状のシステムはすぐに陳腐化して使えなくなってい

く。チベット文字システムも同様であった。MacintoshのOSは改良され、それに合わせて機械自体も入れ替えていかねばならない。そしてチベット文字システム自体も新しいOSに合わせてアップデートし続けていかなければならなかった。しかし、ユネスコからのブータンへの援助は一時的なものであったため、ブータン政府にはチベット文字のシステムやそれが動くMacintoshを維持していく財力はなかった。ここで再び今枝先生が動かさなければならなくなった。

今枝先生は今回は開発資金を求めて、諸方を行脚することとなり、最終的には母校の大谷大学の真宗総合研究所がチベット研究の基盤を整備するために、チベット語システムの開発を援助するところまで話をこぎ着けた。大谷大学は日本のチベット学の研究センターを自認し、その歴史と伝統、そして日本で唯一のチベット人教授ツルティム・ケサン先生を擁していた。その矜持に基づき、この困難なプロジェクトに協力することになったのである。その当時、私は東京の財団法人東洋文庫のチベット研究室研究員であったが、コンピュータ処理の人文科学への応用に関心を持っていたため、チベット語フォントの開発に協力することとなった。ただ、私はコンピュータ業界にとっては素人にすぎず、プログラマのハートウェル氏の要求水準には到底およばなかった。何度も話し合っていくうちに、私はプログラマの要求を理解するようになり、一方、ハートウェル氏もチベット文字のシステムを自ら学び、その規則に精通するようになっていった。こうして、文系と理系の専門家同士の協力は少しずつ軌道に乗り、遂には、われわれは、新しいMacintosh OS 7.1用のTibetan Language Kit for Macintoshを、1995年に国際チベット学会で発表することとなった。これはアップル社の協力も得て、システムレベルでの言語追加機能として提供されたもので、Macintosh上での多言語環境の一部を構成するものであった。

ここで終わらないのが、コンピュータの世界の通例である。2001年に突如、アップル社の創始者でありながら、会社を逐われていたスティーヴ・ジョブスがアップル社に返り咲くことになった。われわれアップルファンには歓迎すべきことであったが、ジョブスはそれまでのMac OSの基盤を、自らが社外で開発していたUnixベースのNext OSに取り替えてしまった。当然、多言語環境も全く別のものにすげ替えられ、文字コードはユニコードで処理されるようになった。そのため、これまで独自の文字コードで動いていたTibetan Language Kitは作動しなくなってしまう。しばらくは旧OSとの併用が続いたが、徐々に新OSであるMac OS Xへの移行が進んでいく。われわれは、チベット文字システムの開発を継続するだけの体力を持ち合わせていなかった。その中で、われわれのプロジェクトの推進役であった今枝先生が、あまりのストレス(世界を駆け回り、研究と、資金繰りに奔走していた)に精神的な病気を発症してダウンし

てしまったのである。もはやプロジェクトのリーダーを続けることはできなくなった。支柱を失ったわれわれは、しばらくは今後の方向性を決めかねていた。撤退か、細々と過去の遺産をアップデートしていくかも決められなかった。

プログラマのスティーヴは、チベット語システムの開発から利益を得ることはできず、ほとんどボランティアで係わってくれていたが、そのような折、マイクロソフト社がWindowsのためにチベット文字システムを開発してくれるようハートウェル氏に依頼した。マイクロソフト社はわれわれよりも遙かに高額な報酬をハートウェル氏に提供したので、彼は新しいユニコードによるチベット文字システムをWindowsのために開発することになった。その開発にはわれわれのプロジェクトで培った知識やアイデアが大いに役立ったのだが、同時に全く新しいオープンタイプのフォント処理の考え方も取り入れられていた。チベット文字の入力・表示の規則はシステムレベルでの機能ではなく、フォント自体の中に組み込まれることになった。こうしてユニコードによる新しいチベット文字システムは、Mac OSのためではなく、Windowsの方に先に実装されることになった。

しかし、ハートウェル氏はその後、われわれ大谷大学のために再び開発プロジェクトを再編成し、フォントについても、新たに私の教え子で、日本で唯一のチベット寺院を広島に建立していた野村正次郎氏にも協力を仰ぎ、Windowsのために開発したチベット文字システムの考え方をMac OS Xに対応させることに成功した。そのチベット文字システムは、今後OSのアップデートに対応させていくために、大谷大学からアップル社に無償で寄贈し、Mac OS Xの一部として正式に採用されることになった。こうしてチベット文字システムの開発は大谷大学の手から離れることになったが、そのことにより着実にMac OSの一部として改良が続けられることになった。2010年には、スティーヴ・ジョブスの賛同も得て、iOSにも移植され、iPhoneやiPadでもチベット文字システムが稼働するようになった。Windowsでは先を越されたが、スマートフォンやタブレットではiOS上でのみチベット文字を使えるようになり、世界中のチベット人が、iPhoneやiPadを使ってメールやメッセージをやり取りしている。一般のチベット人のみならず、チベット寺院のなかでも僧侶たちがiPhoneで連絡を取り、iPadで経典を読む姿が多く見られるようになった。かれらは実はこのシステムが大谷大学の今枝先生の活躍から始まった長い歴史を知らずに、この文明の利器の恩恵を享受しているのである。そして、たぶんこのような開発の歴史は忘却の淵へと沈んで行ってしまうことだろう。そのことに寂しさを感じながら、ここに少しばかりの記録を残しておく。